

り、是を切て肥地に埋みをけば菌多く生ず、泔水などかけをくべし、久しき楮島に多きものなり、  
〔日本山海名産圖會〕二香茸一名香蕈香菌一名香蕈處一名香蕈茸

日向の産を上品とす、多くは熊野邊にも出せり、略今和州吉野又伊勢山などに作出せるもの、日向には勝れり、其法は扶移ての樹を多伐て、一所にあつめ、少し土に埋め、垣を結まはして風を厭其ま、晴雨に暴すこと凡一年計、程よく腐爛したるを候がひて、かの斧をもち撃て目を入置くのみにて、米泔を沃ぐこともなし、されども其始て生ふるはすくなく、大抵三年の後を十分の盛りとし、それより毎年に生ふるのすくなければ、又斧を入れつ、年を重ねなり、春夏秋と出て冬はなし、其内春の物を上品として、春香はること稱す、夏は傘薄く味も劣れり、又別に雪香ゆきこと云て、絶品の物は、縁も厚く形勢も全備へり、是は春香の内より撰出せるものにて、裏なども潔白なるを稱せり、

茸狩

〔倭訓栞前編十四〕多たけ略○中 たけかりは、菌獵の義

〔古今和歌集秋五〕きた山に僧正遍昭とたけかりにまかれりけるによめる、そせい法し紅葉は袖にこき入れてもていでなん秋はかざりと見ん人のため

〔親俊日記〕天文二十一年十月五日、龍安寺へ御成、松茸狩

〔百一錄〕寛文十三年元○延寶九月廿五日、女院御幸于岩倉、茸狩御遊云々、

〔閑窓自語〕詠茸狩於和歌事

寛延二年九月月次和歌御會に、故殿光○柳原秋山といふ事をよみ給ひける、

あかず猶茸狩りくらしかへるさにこのみをひろふ秋の山ぶみ、櫻町院上皇時仰せられけるは、内々の和歌には、この後よみ入れてもくるしかるまじくとぞ、それよりこのかたたけかりのことおほやけわたくしのうたにも、人々よみ侍るなり、又この事をあんずるに、ふるき事にて、古